

集荷代行サービス 高知で実験

直売所 出荷

売る喜びが奏功し…

(社)高知県自治研究センターは黒潮町の中山間地域で、自動車などの交通手段を持たない高齢農家が野菜などを直売所に出荷するのを代行する「庭先集荷サービス」の実証事業に取り組んでいる。高齢農家に直売所出荷を促し、生きがいを持ってもらい、健康増進や地域活性化に結び付ける計画だ。この事業を機に休耕地を復活させ、野菜作りを再開した高齢者もいる。

新たな福祉の道探る

サービスは農家約20戸が利用し、農家は週4回、自宅近くの集荷拠点に品物を運ぶ。センターと契約する田辺満子さん(66)が1日10カ所以上の拠点を回って品物を集め、町内3カ所の直売所に運ぶ。午前7時の開店

間に合うよう、集荷は5時半から始まる。店頭で売れ残った野菜は回収し、出荷した農家に返す。自らも直売所に出荷する田辺さんは「冬は暗い中の巡回で大変だけど、人の役に立てるのは大きな生きがい」と胸を張る。

直売所のある町中心部から10キロほど離れた馬荷地区の宮川幸由喜さん(76)は「田辺さんから売れ筋の野菜も教えてもらえるので、やる気がわく。病気をしている暇もない」と目を輝かせる。以前は30分かけてバイクで出荷していた同地区の矢野茂美さん(68)は「本

高齢者 元気

当に助かる。次は何を売ろうかと考える張り合いができた」と喜ぶ。

同サービスは今年で3年目。センターは今後、利用者に医療費の削減状況を聞き取るなどして、直売所出荷がもたらす健康増進の効果を実証する予定。畦地和也センター理事は「直売所活性化の産業面、健康増進の福祉面の双方を兼ね備えた『産業福祉』のモデルをつくりたい」と考える。集荷役の田辺さんにはガソリン代などを含め1カ月に10万円超の委託料を払う。財源は、国土交通省の「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業一を利用するなどして捻出(ねんしゅつ)している。



西南特集

高齢者の作物直販所へ

トラック 集配 運ぶ 活力

黒潮町の田辺さん夫妻

幡多郡黒潮町。薄暗い早朝の山道を1台の軽トラックが山積み荷物を揺らしながら走っていく。乗車しているのは同町奥湊川の田辺俊夫さん(72)満子さん(66)夫妻。2年前から高齢者の作った農作物などを集め、代わりに町内の直販所まで運んでいる。生産者らは「2人がおるから今も農業を続けられる」と感謝の声を寄せる。中山間地域の高齢者に夫妻の軽トラが活力をもたらしている。

笑顔励みに週4回

仕組みづくり
高齢化。同町も例外では部の直販所を持って行けない。特に中山間部は農産物を生産しても町中心た。



施設での仕事を退職した「喜んでくれる人がおる満子さん。孫の世話をしけん、えいがよ！」と気ながら過すうち、「人にも留めない。の役に立つ仕事があった。その思いが膨らんでいった。そんな折、地域活性化を考えるワークショップで知り合った同セ集配所や生産者宅の軒先を巡り、ミヨウガやナリ関係者に集配役を依頼され、二つ返事で引き受けたという次第だ。季折々の農作物を満載して3カ所の直販所へ向かふ。満さんが集配を受けて3カ所の直販所へ向かう。満さんが集配を受けて3カ所の直販所へ向かう。満さんが集配を受けて3カ所の直販所へ向かう。



生産者と話しながら野菜を軽トラックに積み込む田辺俊夫さん(中央)と満子さん(左) (写真はいずれも黒潮町内)

そうした地域の実情に、県内の自治体職員や大学教授らでつくる県自営治研究センター(高知市鷹匠町2丁目)が2007年、高齢者も農産物の直接販売に参加できる仕組みづくりに着手。交通手段を持たない生産者の住む集落の集荷を検討していた。一方、同年1月に福祉



集荷した農作物を直販所に降ろす満子さん

同センターの友永公生さん(38)は「黒潮町総務課は「県内で第三者による集配形態は珍しいと思う。このシステムが自立するためには売り手、市場、町の3者で人件費などを負担するのが理想だが、高齢者の元気の源にもなるので町全体、県全体に広げたい」とする。田辺さん夫妻の軽トラは地域の元気の目印だ。高齢化、過疎、耕作放棄地。中山間地域の課題を分散するように今日も元気よく走っている。

(幡多支社・井上真)



足跡

H21.9.20(日)
四国新聞

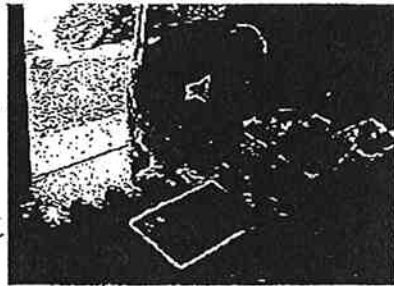
お年寄りのコミュニティ——高知・黒潮町

クジラに合える町、潮風に揺れるTシャツアートの町として有名な高知県黒潮町。ここでも、集落維持のための取り組みが展開されている。キーワードは「庭先集荷」。どんな内容なのか。

出荷できない

平野が少ない黒潮町は農地が山すそに広がっており、農家の高齢化も進んでいる。しかも、地形的な制約から物流との接点を失い、作物をつくる元気はあるが、出荷するすべがないため、生産をあきらめざるを得ない状況に追い込まれていたという。このまま放置すれば、耕作放棄地が増え続け、集落の活力が落ちて

庭先集荷の風景(上)。回覧しない会話を元気の源た(黒潮町提供)



庭先集荷で生産継続

元気回復、放棄地も減少

くることは明らかだった。そこで、高知県自治研究センター(高知市)の調査研究として取り組んだのが庭先集荷。8地区が参加、一定の成

果を挙げている。「同じ悩みを抱える農家は多かったようで『生活が楽しくなった』。これで生産を続けられる」と喜んでいる」とは、調査研究を担当する黒潮町総務課の友永公生さん。地産地消チームもあって、消費

者の反応もよく、土・日を中心に、出荷した作物のほぼ9割が売れているという。

産業福祉

庭先集荷の直接効果は、生産し続けることによるお年寄りの生きがいづくりや健康増進につながったこと。間接的には、医療や介護などのコスト低減が挙げられるだろう。もちろん課題はある。庭先



黒潮町

集荷のコストをどう工面するかという点だ。今は、調査研究費や国の支援で賄っているが、この問題をクリアできなければ、持続可能なビジネスにはならない。

ただ、友永さんは「お年寄りによる小さなコミュニティビジネスだから経済効果は小さい」と断った上で、「数値には表れない多面的な効果は大きい」と、事業の将来性を強調する。確かに、耕作放棄地の解消、集落の維持、再生など、さまざまな成果が挙げられている。

さらに、「お年寄りの働く場を創出することも福祉」という考え方も明確に読み取れる。それは、お年寄りを保護する「福祉産業」から、生きがいを持つ「働き、自ら元気になる」「産業福祉」への転換という挑戦でもある。ちよつとしたつながりの回復が、集落の維持に大きな効果を発揮する。黒潮町の庭先集荷が、それを証明してくれている。

取材 金藤彰彦、山田明広

PC・携帯電話からも「意見募集」
ご意見やお説きになりたいテーマなどをお寄せください。

四国新聞社編集委員室あて
〒760-8572(住所不要)
FAX 087(833)2569
E-mail: shokoku@shokoku.co.jp
上のQRコードからアクセス

毎週日曜日掲載

少子・高齢化や働き盛りの世代の流出によって、国土地士や全や、耕作放棄地は増え続け、そのままではいけない。ただ、「このまままもなくない。そこには住民が上上がった地域も少なくない。そこには住民の根拠源に迫

集落を守る
立ち上がる住民



足跡

No.480